

大学版 ID 専門家養成上級ワークショップの構想とその体系化

Preparation of an Advanced Workshop for Instructional Designers in Higher Education

鈴木 克明^{*1} 市川 尚^{*2} 高橋 暁子^{*3} 竹岡 篤永^{*4} 根本 淳子^{*5}

Katsuaki SUZUKI^{*1} Hisashi ICHIKAWA^{*2} Akiko TAKAHASHI^{*3} Atsue TAKEOKA^{*4} Junko NEMOTO^{*5}

^{*1}熊本大学 ^{*2}岩手県立大学 ^{*3}徳島大学 ^{*4}明石工業高等専門学校 ^{*5}明治学院大学

^{*1}Kumamoto University ^{*2}Iwate Prefectural University ^{*3}Tokushima University

^{*4}National Institute of Technology, Akashi College ^{*5}Meiji Gakuin University

<あらまし> 特定領域に強い教育設計専門家を養成する研究の集大成として、最終段階で行う高等教育機関向け上級 ID ワークショップを構想した。その参加要件を洗い出したところ、関連プロジェクトの成果を前提条件として組み合わせることで体系化できる見通しが立った。最後に、今後の発展の可能性と方向性について述べた。

<キーワード> 教育設計 (ID), 専門家, 特定領域, 上級ワークショップ, 体系化

1. はじめに

高等教育機関における教育の質向上への関心が高まっており、FD の義務化に伴い大学教育機能向上の専門家が配置されるケースも増えている。一方で、FD 活動が外部講師を招聘して行われるイベント的な講演会に留まっているケースも多く、授業の改善に結実しにくいという指摘がある。また、FD 活動のターゲットがシラバスの書き方や優秀教員の表彰、あるいは相互授業参観や授業カウンセリングなどパターン化される傾向にあり、設計よりも実施技術に重点が置かれがちで、新しい発想が生まれにくいとの指摘もある。

本学会では、学会主導の特別委員会活動として企画・実施した「大学教員のための FD 研修会(ワークショップ)」が SIG01 大学教育 FD と SIG07ID の活動として引き継がれ、教育工学選書にその成果が紹介されている(松田ほか 2017)。さらに、セミナーにおけるグループ活動を支援するファシリテータの養成と認定や、事後課題レポートの添削者の養成と認定など、重層的な広がりを見せており、体系化が進んでいる(高橋ほか 2018)。また、熊本大学教授システム学研究センターでは、文科省教育系大学間共同利用拠点「教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点」として、次世代の大学を創造することを目指したオンライン教材「教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)」の無料版・有料版の提供を開始した(鈴木ほか 2019)。

上記の関連プログラムの延長線上に位置づく高い専門性を前提として、特定領域に強い教育設計専門家の養成に取り組んでいる(鈴木・平岡 2017; 鈴木ほか 2018)。本発表では、その集大成として、高等教育機関向けワークショップを構想した概要と関連プログラムとの連携の可能性について報告する。

2. 上級ワークショップの概要

表 1 に大学版上級 ID ワークショップの概要を示す。このワークショップでは、本学会の FD セミナーのように自分自身の授業改善を目的とせ

ず、同僚などの授業改善を支援できる専門家の養成を目指している。したがって、ワークショップ参加の条件として、自分以外の同僚などの授業についてのヒアリングを完了し、その改善提案の素案を持参することを求めることになる。

ワークショップでは互いに持ち寄った改善提案(素案)を共有し、改善提案の完成度を高めて持ち帰ることを目的とする。そのためには、「ID モデルではこうだからこうしてはどうか」とか「目標と評価方法が合致していないので修正すべきだ」という類の教科書的な提案ではなく、互いが持ち寄ったヒアリング結果を解釈し、担当教

表 1: 上級 ID ワークショップの概要

目的: 同僚など自分以外の授業改善提案を完成させ持ち帰り、どの程度受け入れてもらえたかについての事後報告書をまとめること。改善提案を同僚などに全面的に受け入れてもらうことを合格の条件にはしないが、関係が悪化せずにまた提案をさせてもらえる程度に維持することを求める。

参加要件(前提):

- 1) 同僚などにヒアリングし、科目担当教員としての思いや願いを聞き取った結果を所定のフォーマットでまとめてあること。
- 2) 次世代の大学を実現するために求められている改善の方向性についての基礎知識を有し、それを踏まえた改善提案の素案をまとめてあること。
- 3) 互いに持ち寄る改善提案がどの程度効果的なものかを見定めて、改善案の完成度や受け入れやすさを高めるための提案を創出するのに必要な ID の基礎知識を有していること。

方法: 事前・事後課題レポート付対面研修(1 日間)で、ペアワークとグループと全体への報告を組み合わせる。講師陣がアドバイスしなくても参加者相互の意見をまとめることで満足できる提案を持ち帰ることができることを目指して研修方法を洗練させるが、必要に応じて講師からの全体アドバイスで参加者全員の納得度を高めるように工夫する。

員の思いに寄り添う必要がある。実現可能で効果が期待できる改善案を「こういう授業がやりたかったんです」と言ってもらえる確率を高めた形で持ち帰るための支援を互いに試みなければならない。担当者が何を教えたいと思っているのかを理解・共感していることを伝え、その共通理解の上で、担当者が望む授業を担当者の考えが及ばなかったレベルで提案する能力を備える必要がある(鈴木ほか 2018)。デザインの目的は、顧客もデザイナー自身も最初は完全に想像しえなかった何か(an expected unexpected outcome)がデザイン過程で生み出されること(鈴木・根本 2016)にあるならば、上級 ID ワークショップではそれを現実に生起させる必要がある。

したがって、参加者に求められる参加条件は厳格なものになり、またワークショップまでの準備にも時間を要することとなる。それに加えて、事後にも科目担当教員とのセッションを持ち、その結果をまとめた事後報告書の内容を吟味し、認定の判断をすることになるだろう。

3. 参加要件と関連プログラムとの連携

表 1 に掲げたワークショップ参加要件 1) については、本研究のオリジナルであり関連プログラムの活用はできない。これまでの研究実績(鈴木ほか 2018)を踏まえて改訂中のヒアリング項目とチェックリストなどを事前に提供し、参加者はそれらに従って各自で同僚にヒアリングしてその結果をまとめることになる。ヒアリングは 2 回実施し、初回で聞き取った科目の概要と担当者の思いをいったん整理し、補足的質問のための時間をもう一度確保する。それらに基づいて改善案の素案を作成することになるが、そのプロセスを支援するためのフォーマットをワークショップ開催に向けて準備中である。

参加要件 2) については、熊本大学が公開を開始した「教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)」の無料版を学ぶことで満たすことができる。この講座は次世代の大学の創造を担う教員の育成を視野に入れたもので、自ら学ぶ学生と教えない教員を柱に据え、学生向けのテキスト(鈴木・美馬 2018)を採用している。無料版では掲示板への投稿や添削指導は受けられないが、授業方法・評価方法・学習目標の 3 観点でのデザイン提案の概要と例示が閲覧でき、理解を確認するためのクイズにも挑戦できる。無料版でも学習状況証明書が発行されるので、それを提出してもらうことで要件 2) が確認できる。

参加要件 3) については、本学会の FD セミナー認定添削者の有資格であれば問題ないだろう。認定添削者になる要件として認定ファシリテータと参加者としての修了証が必要なので、自分の授業の改善を ID の視点で試みた経験に加えて、他者の改善に寄り添い評価した経験が備わっていることになる。

類似の試みとして、日本医療教授システム学会が定めている医療学習デザイナー資格(三好 2018)など、同等の経験や能力を有することが確

認できれば要件 3) を満たしたと判定できる。その他にも、基礎資格の認定者以外で参加を希望する人が受験できるオンラインテストを用意する可能性も検討してもよいかもしれない。

4. おわりに

本稿では、特定領域に強い教育設計専門家を養成する研究の集大成として、最終段階で行う高等教育機関向け上級 ID ワークショップの構想を述べた。その参加要件を洗い出したところ、関連プロジェクトの成果を前提条件として組み合わせることで体系化できる見通しが立ったことも報告した。

本年度中に予定されている上級 ID ワークショップでこの計画が一定の成果を上げることができれば、一般に公開し、履修証明制度に組み込むことを目指していく。科研費による研究成果を活用して文科省教育系大学間共同利用拠点としての役割を拡充することにつなげていく。

さらに、大学版だけでなく、企業の人材育成担当者も交えて実施してきた熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン(入門編・応用編)」に加えて、熊本経済同友会向けに施行を重ねてきた企業向け上流工程を含む ID ワークショップとも連携を図り、対象者を広げてメニューを充実させていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、平成 28-32 度文科省科研費(基盤研究 B: 課題番号 16H03081)の補助を受けている。

参考文献

- 鈴木克明, 喜多敏博, 平岡齊士, 長岡千香子(2019) 教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)の構想と無料版・有料版の公開. 第 44 回教育システム情報学会全国大会(静岡大学) 発表予定
- 鈴木克明, 市川尚, 高橋暁子, 竹岡篤永, 根本淳子(2018) 授業担当者インタビューによる「思いに寄り添う提案」の基盤づくり. 日本教育工学会第 34 回全国大会発表論文集, 317-318.
- 鈴木克明, 根本淳子(2016) 教育工学をデザイン研究の系譜で再定義するための萌芽的研究の着想と目標. 教育システム情報学会 第 41 回全国大会(帝京大学) 発表論文集, 343-344.
- 鈴木克明, 平岡齊士(2017) 特定領域に強い教育設計専門家を養成する研究の着想と着地点. 日本教育工学会 第 33 回全国大会(島根大学) 発表論文集, 321-322.
- 鈴木克明, 美馬のゆり(編著)(2018)『学習設計マニュアル:「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房
- 高橋暁子, 根本淳子, 鈴木克明(2018) 日本教育工学会 FD ワークショップにおける添削者養成講座の設計. 日本教育工学会研究報告集(JSET18-5), 183-187.
- 松田岳士, 根本淳子, 鈴木克明(編著) 日本教育工学会(監修)(2017)『大学授業改善とインストラクショナルデザイン』教育工学選書 II-14. ミネルヴァ書房
- 三好雅之(2018) 医療学習デザイナー資格の解説と申請のすすめ. 医療職の能力開発(日本医療教授システム学会論文誌)5(2):62-65.